

肢体不自由教育と知的障害教育の連携による 発達障害や軽度知的障害のある生徒に対する書字指導Ⅱ

—キャリア教育としての書字指導の価値—

○諏訪肇

河野文子

阿部敦子

(東京都中部学校経営支援センター) (筑波大学附属桐が丘特別支援学校) (東京都立青峰学園)

KEY WORDS: 発達障害 連携 書字指導

(はじめに)

一昨年、本大会において「肢体不自由教育と知的障害教育の連携による学習障害のある生徒に対する書字指導」として発表を行った。この研究を基礎研究とし、実践事例の多い肢体不自由教育における書字指導の効果を検証し、キャリア教育の視点から価値づけを行い、発達障害や軽度の知的障害のある生徒への指導に活用していくことを考えた。

本研究は、そのうちキャリア教育の視点から書字指導の必要性について考察した研究である。

(目的)

肢体不自由教育と知的障害教育の連携により、発達障害や軽度知的障害のある生徒への書字指導法を開発し、キャリア教育の視点からその効果を検証する。

(方法)

読み・書き・計算の力は、キャリア教育において基礎的なアイテムである。発達障害のある生徒にとって書く力は、書くことで落ち着く・集中する、場面緘黙や発音が不明瞭であっても伝えられるなど、その障害をカバーしてくれる力でもある。

発達障害や軽度知的障害のある生徒が通う都立青峰学園では、単に就職するための技術を教えるだけでなく、社会人として必要な心構えや自他を大切にしている態度など生徒の内面についても重視して教育を行っている。生徒の中で、力があるのに関わらず自己肯定感の低い生徒が多いことが気になった。また、それらの生徒に、薄い字、濃い字、小さい字など書字に課題のある生徒が多いことも気になった。自己肯定感やキャリア教育にとって重要な感情であるし、書字は報告や伝票を書くなど就労するうえで必須の技術である。

基礎研究では肢体不自由教育の書字指導を活用し、書道を取り入れると、筆圧のコントロールなど書字の改善が図ることが分かった。さらに、書字の技術が向上し書くことの苦手意識が軽減すると、生徒の自己肯定感が醸成されていくことに効果があることも分かってきた。

そこでこの研究を都立青峰学園だけに留めるのではなく、多くの知的障害特別支援学校高等部の現状に照らし合わせ、汎用性のある研究にしていくことを考えた。そのため 1) 生徒の実態に関する調査と 2) 教員の指導に関する調査の2つの調査を行った。

1) 生徒の実態に関する調査

○「書字」についてのアンケート A の実施

アンケートでは、①現在指導している生徒、あるいはこれまで指導してきた生徒に関して、書字が困難だと思われる生徒がいるか ②それはどのような困難か の2つの設問について回答を求めた。

○アンケート A の分析

- ・形が不正確または、整っていない字を書く生徒が多い。
- ・文字を書くこと自体が難しく、文字を書きたがらない生徒も多い。
- ・濃淡や大小など文字自体に課題のある生徒が多い。

などの実態が明らかになった。

2) 教員の指導に関する調査

○「書字」についてのアンケート B の実施

アンケートの設問は、①これまで担当してきた生徒の中で書字が困難な生徒に対して書字の指導を行ってきたか ②それはどのような指導か ③その指導は成果があったと思うか ④書字に対する指導をいつどこで行うべきだと考えるか、の4つの設問について回答を求めた。

○アンケート B の分析

- ・担当教科の指導が中心で、書字の指導は特に行っていない場合が多い。
- ・ノートの字やテストの解答などの字を書くときに読めるようにきれいに書くよう指導していることは多い。
- ・国語の中で書字指導の必要性を感じている教員は多い。
- ・教科指導の中で、教科の内容を指導する時間が中心となり、書字を細かく指導する時間がない。
- ・小学校(小学部)の段階でしっかり書字の指導を行って基本的な書字の力をつけてほしい。

などの課題が明らかになった。

(結果)

軽度知的障害や発達障害のある生徒の中で、書字の問題がある生徒の存在と、その指導の必要性を認識している教員が多いことが明らかとなった。しかし、それらの生徒への書字指導は、十分になされていないのが現状であり、実際に困難な場面に直面しても、その場で教員が効果的な指導できることが少ないという問題点も明らかとなった。

書字指導は、小学校の段階に学習指導要領の国語科の書写として文字を書く基礎・基本から指導することとされている。また、知的障害教育のカリキュラムでは、特別支援学級や特別支援学校で、書字指導が自立活動の中でも位置づけられ実施されていることが多い。

本研究の対象の知的障害特別支援学校高等部の生徒の中には、特別支援教育ではなく普通教育のカリキュラムで小学校・中学校の時期を経ている者も多く、それぞれの学習の段階で教科内容の指導と比べて書字の問題は見過ごされることが多かったと考えられる。しかしその必要性が高く、知的障害教育のキャリアを考える上で書字教育をどのように位置づけカリキュラムを作成すべきかが課題である。

(考察)

本研究と「肢体不自由教育と知的障害教育の連携による発達障害のある生徒に対する書字指導」Ⅰ・Ⅲの研究により、発達障害や軽度の知的障害のある生徒へ肢体不自由教育における書字指導の指導法を活用することにより、生きる力が育成されることが分かった。

今後はさらにさまざまな視点から実践・検証を重ね、よりよい指導法の開発を進めていく。

(文献) 平成 20 年 (2008 年) 3 月、小・中学校の学習指導要領及び幼稚園教育要領改訂、平成 21 年 (2009 年) 3 月、高等学校・特別支援学校の学習指導要領、他。

(SUWA Hajime, KAWANO Fumiko, ABE Atsuko)